

# 黙示録の記録

## 第6章

### 創造主の大いなる怒りの日

著／ヘンリー・モリス

訳／宇佐神 正海

# 黙示録の記録

## 目次

- 第5章 小羊が相応しい
- 第6章 創造主の大いなる怒りの日
- 第7章 大患難における聖徒たち
- 第8章 外からの攻撃を受ける地球
- 第9章 悪魔的災害

## 第6章 創造主の大いなる怒りの日

### 封印を紐解く

#### 黙示録

賛美の時は遂に終わり、裁きの時が来ます。その権利を持たれる小羊は、地球の所有権の権利証書を受け取り、早速、自分の王国を占有する業に取り掛からなければなりません。主の書かれた巻き物は丸められて、七つの判で封印されていました。大いなる所有権が公に実証される前に封印は破られ、書面は公に見せられなくてはなりません。同じ理由で、小羊の聖なる所有権（創造主としての所有権）が公に認められる前に、地への侵入者と彼らの追従者は追放されなくてはなりません。こうして、封印を紐解くことは地に対する裁きと同時にあります。次々と封印が紐解かれるたびに創造主の怒りが地球とその住民に次々と災害をもたら

します。

こうしてかつてなかった世界の最も厳しい苦難の七年間が始まります。これが「主の日」で、創造主が長年の沈黙を破って天から偉大な権力をもって語りかける時です。この時期の大いなる裁きは旧約の預言者特にダニエルとエレミヤによって火のようなことばで書かれています。しかしながら、基本的問題と我々がそれら全部を洗い出し、分類し、正しい見解に置き、年代順の枠組みを整えるために黙示録を必要としているのです。

この七年の期間（一章参照）は、明らかにダニエルの有名な「70週」【ダニエル書9章24（27節）とも同じなのです。不信のイスラエル人に関して、それが「ヤコブの悩みの時」【エレミヤ書30章7節】に当たるはずです。不信の異邦人に取っては、「主がすべての国に向かって怒り」【イザヤ書34章2節】とある時に当たります。

黙示録6章に記されている場面は、集まった聖徒たちとヨハネが待っている天から見ての記載です。地上で起こっている出来事は、挿入的な章7、10、11、13節にある地上での見方からさらに詳細に記されています。天においては、四つの大きな馬とそれらに乗っている恐ろしい騎手に関する象徴が用いられ、地上では彼らが解き放った恐ろしい裁きが実に文字通り実現します。

黙示録6章1節　また、私は見た。小羊が七つの封印の一つをといたとき、四つの生き物の一つが、雷のような声で、「来なさい。」というのを私は聞いた。

小羊はみ座にすわる方の右手から土地の権利書の巻物（地権証）を受け取った。この儀式が、贖い主を褒め称える広大無辺の荘厳な賛歌を引き起こした。賛歌が終った今、小羊は封印を紐解いてゆきます。あたたかも地上にまさに始まろうとしているすごい嵐の前兆であるかのように、雷のような声が御座から、四つのケルビムの一つから発せられます。それから、力あるケルブが話します。

その声は雷のようです。「来なさい」と。欽約聖書では、「来て見なさい」と翻訳しています。大部分の写本はこの読み方を支持しているようです。これが正しいのかもしれない。ちょうど「行け」と訳すこともできるように、また「来なさい」も認められるべきです。ともかく、語っておられる方は、「生き物」ケルブが呼びかけ、最初の力ある裁きのメッセンジャーを送っています。

## イスラエルへの侵攻

とかくするうちに、地上にいる多くの人々にとって将来励みになり、楽観的になる重大な出来事が地上に起こってきます。数十年の戦争とインフレの後、軽減できない複雑な政治的緊張状態と全地球の疾病のすべての根源など、ほとんど一夜のうちに、世界の主な問題の大部分が解決されたように思われます。

ロシアとその世界制覇計画の脅威が、驚くような自然大災害の複合体によって取り去られます。この災害はロシアの軍事機械の大部分を滅ぼします。この話はずっと昔予言されエゼキエル書38、39章に記録されていて、ついに実現しました。黙示録6章に続く出来事を理解するために、これら二つの章【エゼキエル書38章、39章節】を簡単にまとめるため、ここで黙示録の解説からそれることは必要です。

エゼキエル書38章は、「のちの日に」【エゼキエル書38章8、16節】イスラエルの地への突然の侵入を予測しています。

その時はイスラエルの民がいろいろな国から自分の土地に帰って、そこで安全に生活しているように思われる時です。近隣のアラブからの当面の脅威は何らかの方法で消え去りました。(おそらく、エジプト、アラブその他の国々との不可侵条約を通して、または、通常の方法では操作できない新しい兵器体系の発展によって)。

しかし、はるかに北の方にあったロシアはなおイスラエルの和解出来ない敵であり、イスラエルを取り巻く操られている諸国の輪を通してその力を徐々に広げていました。これらがエゼキエル書38章2〜6節に一つ一つ名前が挙げられています。その予言は次の通りです。

「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地のゴグに、あなたの顔を向け、これに対して預言して、言え。主なる創造主はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。わたしはあなたを引きもどし、あなたのおごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての軍勢と、馬と、騎兵とを引き出す。彼らはみな武器をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつるぎをとる者で大軍である。ペルシャ、エチオピア、プテは彼らと共におり、みな盾とかぶとを持つ。ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベテ・トガルマと、そのすべての軍隊など、多くの民もあなたと共にいる。」

ゴグは、明らかにこれら軍隊の司令官の名前で、彼はヤペテの息子マゴグが最初に住み着いた地域から来ました。この名はおそらく近代の「ジョージア」をさすことでしょう。そして、ゴグの名は彼の祖国に言及しているといってもよいかも知れません。たとえば、スターリンはソビエト連邦のジョージア(接頭語「ma」は「・・の地」を意味します。そして、「ジョージア」は「Gogia」と読むことが出来る)からでした。そして、彼の最初の継承者は「Georgi」(Malenkov)という名でした。事実、ゴグは、パロのように、広い

北方領土にいる民族の祖先の家に由来した一般的肩書きと言ってよいのです。メシエクとトバルもまたヤペテの息子たちでした。そして、古代のまた近代の民俗学者たちは、彼らの名が、モスコウ(Moscow) または(Muscovy) とトボルスク(Tobolsk) という近代の名前に受け継がれていると認めています。モスコウとトボルスクはそれぞれロシアの西と東の主だった都市です。最後に、多くの学者は、「大君」は事実「ロシユの君」であると、そしてロシアは、事実この節そのものに由来した現在の名であると強調しています。このように、この終わりの日の反イスラエル同盟の指導者がロシアになることは、ほとんど疑いの余地はありません。

他の国々はイスラエルと中東すべてを時計の輪のように取り巻いています。もちろんペルシャは現在のイランです。エチオピアはエチオピアとして知られている現在の土地を組み込むが、エチオピア人の祖先が最初に定住した紅海を横切るアラビヤ半島の一部をも含むのかも知れません。リビヤはもちろん今日なお同じ名です。ヤペテの別の息子ゴメルはキムメリオス人、クリミヤ半島、ゲルマニア(古代中部ヨーロッパの地域)に彼の名を与えました。こうして、「ゴメルとそのすべての軍隊」の言及は黒海から東ドイツに定住したすべての人々に当てはまります。同様に「北の果のベテ・トガルマと、そのすべての軍隊など」は、おそらく、アルメニアとトルコを指すことでしょう。これら諸国の多くは、今日、イスラム諸国であり、それらの多くは、たとい独立国であってもロシアの勢力圏内にあります。これらすべては、強力な反イスラエルの国です。

イスラエルへの突然の侵攻は、「シバ、デダン、タルシシの商人たち、およびそのすべての若い獅子たち」によって、軍事的ではなく言葉による抵抗を受けるでしょう。シバとデダンはアラビアにあります。この節で、その時ロシアの貪欲な対象である裕福なアラブ産油国が、なおロシアの管理外にありえたことを示唆し

ています。タルシシはおそらくフェニキア人によって設立されたカルタゴと同じです。タルシシは「精錬所・溶鉱炉」を意味し、古代フェニキア人、最初の偉大な水夫たちは、多くの土地で鉄の精錬、採鉱、入植の基礎を造りました。これらには少なくともスペイン、イギリス、そしてアメリカさえそれに含まれる可能性があります。こうして、近代的意味で「タルシシユの商人たち、およびそのすべての若い獅子たち、」と同じなのは、一般に西洋諸国です。原初のフェニキアは現代のレバノンであり、この国もまたイスラエルと共同歩調を取るでしょう。

攻撃者はあらゆる方向からやってきて、騎兵だけでなく、落下傘兵たちが次から次へと大波のように押し寄せ「雲のように地をおおう。」〔38章9節〕でしょう。彼らの武器は主として木からできたもので、おそらく、リグノセルロース（リグニンとセルロースの合成物で木部の木部繊維細胞壁に生じる）のように非常に強く強い木〔39章9節〕の新しい形態の一つでしょう。おそらくイスラエルの進歩した武器工業技術により金属部分があると作動しないレーザー、またはマイクロウェーブ光線が発展するでしょう。進入する軍勢の圧倒的数の兵力は、抵抗できない数に思われます。そのすべての集団を埋葬するのに七ヶ月必要なほどの軍勢なのです。

然し、創造主は前例のない方法でその時に干渉します。地震、雹を伴った嵐、火山噴火と悪性伝染病のともない複合体、それを補うように侵入軍自体の内部での内戦で、ゴグの軍隊に襲い掛かり、六人中五人を殺してしまいます〔38章19、22節、39章2、4節〕。同時に、大火災がロシア自体と海沿いの同盟諸国を荒廃させます〔39章6節〕。そして、衛星諸国の意思としての世界勢力を完全に取り除いてしまいます。

その「同時発生」が、非常に顕著だったので、たとい大惨事が自然現象であったとしても、すべての諸国はそれらが創造主によってもたらされたと知るでしょう。特にイスラエルは、無神論を捨て去ります。無神

論は、概してシオニスト運動と現代イスラエル民族を支配して来ました。そして、イスラエルは「この日から後、イスラエルの家はわたしが彼らの創造主、主であることを悟るようになる。」〔39章22節〕のです。

この大いなる出来事が、最終的にイスラエルに彼らの古代の神殿を建て直し、古代の礼拝を再開する希望と機会をもたらすことが実際にあり得るのです。イスラムの「岩のドーム」は完全に破壊され、すばらしい宮が建てられます。しかし、このような事態になって、たとい、彼らが彼らの父である創造主礼拝を回復することを求めてさえいても、創造主によって特に準備された残りの民を除いて、イスラエルの民は、なおキリストを拒否するでしょう。

世界の他の国々もまたロシアの滅亡によって残された空虚をすみやかに利用しようと求めます。この大事件での明らかな創造主の役割を速やかに忘れて、西側同盟諸国（おそらくNATO（北大西洋条約機構）の諸国と欧州経済共同体）は、世界の事柄を支配するために計画された巨大な政治・経済・宗教同盟に徐々に進んでいくことでしょう。これら諸国の10カ国（10カ国はみな古代ローマ人への手紙と文化的に、法的に結びついている）は、最初はゆるい同盟に、後で連合した一つの帝国に結び合わされることでしょう。

もはや問題ではないロシアとイスラム諸国と彼らの管轄下にあった中近東の石油資源をもって、これらの西洋諸国は平和と繁栄のすばらしい時代を期待するでしょう。これら諸国の一つに、ものすごく有能なカリスマ的指導者が権力を持つようになります〔ダニエル書7章23、25節〕。そして、彼と彼の国は、そのころ和解出来ない危険な状態にあるイスラエルとすみやかに条約を取り結びます。聖書は、契約が七年の期間であることと神殿の建設と礼拝制定を保証しているだろうとのことは〔ダニエル書9章27節〕、その契約の条件・内容を明らかに示してはいません。

この一連の出来事のある時点で、主は地球の大気圏に天から下ってきて、死んだクリスチャンの大きいなる復活と生きている信徒の携拳が行われます。しかし、それがロシアの侵入の前か後かについては、明確に言うことは出来ません。なぜなら携拳は常に差し迫っているからです。七年の条約の期間は、確かに黙示録6章〜19章のほぼ七年間に当たります。携拳は、それが発動する日の後に来る事はなく、その前のいつ起こってもよいのです。ゴグの破壊された軍隊の木製武器は、イスラエルの人々の七年間の燃料として役立つ〔エゼキエル書39章9〜10節〕事もまた重要です。

ともかく、携拳が起こる時、特に多くのクリスチャンが突然姿を消してしまったことがニュースバリューとなる国々においては、確かに世界中に大変な興奮があるでしょう。多分、何が起きたか推測するための聖書の終末論の適切な知識を持つている人々は十分に残されているでしょう。そして、熱した多くの人々は編集者に手紙を出すことでしょう。自由主義の牧師たちは、自由主義の会衆に携拳説を嘆きながら、姿を消したすべての人々は資本主義者のある種の陰謀によるとして説明しようとして説教します。他の多くのものは外宇宙からの地球外の異星人が彼らの宇宙船にさらっていったと主張します。世界に起こっているその他の動揺などで、姿を消したクリスチャンたちはすぐに忘れ去られ、少なくとも自分の間、世界は、期待される繁栄と平和の幸福感に酔いしれることでしょう。

このすべては黙示録6章の中の出来事の直接の背景です。地上にはロシアが最近滅亡した記憶はなまなましく残っています。興味は、イスラエルと中近東にますます集中し、消え去ったクリスチャンたちは間もなく忘れ去られるでしょう。

携拳は世界にもう一つ重要な影響をもたらしたので。もはや世界に道徳と正義についての重要な発言はありません。そして、快樂の追求と性的不道徳に関するあらゆる記述への制限は解かれます〔エテサロニケ人への手紙2章6〜12節〕。

そうはいうものの、突然思いがけないことが起こります。「人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」〔エテサロニケ人への手紙5章3節〕

**黙示録6章2節** 私は見た。見よ。白い馬であった。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。

これは有名な「ヨハネの黙示録の四人の騎手」のはじめです。もちろん、これらの馬は明らかに象徴的です。天に馬はいません。さらに、最初の馬は他の馬とまったく異なっています。特別な災害が関連して起こる他の馬〔それぞれ、戦争、飢饉、疫病〕とは異なつて、特別な災害とその騎手とは関係ありません。

ある理由で、最も多くの未来派の註解者は、白い馬に乗った騎手を来るべき反キリストと受け取っています。けれども、この解説で、四人の騎手すべては、小羊から直接送り出されていることを認めていないのです。地上にいる邪悪な者に対する裁きのため、邪悪な者のうちで最も邪悪なのは反キリスト自身です。更に、この偉大な「罪びと」は実際に世を征服しようとはしますが、彼が征服することは許されません。それはこの白い馬に乗った同じ騎手その方によって、彼はただちに征服されます（黙示録19章11〜20節を見よ）。この騎手こそ王の王、主の主であるキリストご自身なのです。

歴史上重大なこの局面で、小羊が第一の封印を解く時、「創造主の御子は威勢よく戦に出て行きます」。それから七つの封印の裁きが続く、それから第七のラッパへ、それから七つの鉢へと。しかし、第七の封印は七つのラッパすべてを含み、第七のラッパは七つの鉢のさばきの入口になります。このように、連鎖全体は遂に、敵が完全に追い出されるまで侵入者の要塞に小羊が次々に侵入することを現しており、ハルマゲドンの戦いでクライマックスとなります。その時、偉大な騎手が最後の勝利を得るために、ご自身の白い馬に乗って再び現れます〔黙示録19節、11〜19節〕。

この騎手が冠を持っているただ一人の方で、それは勝利者の冠(ギリシヤ語でステファノス)で、その方は「勝利を得るため」にあるのです。すなわち、彼は王なのです。彼は大きな弓で武装しているが、その弓は戦争を語っているではありません。なぜなら、それは第二の騎手の領域です。征服という言葉は、教会に対する手紙で主がしばしば用いられた「打ち勝つ者」と同じです。最後の教会の手紙で、勝利を得るクリスチャンに対する約束は、キリストとともに座に着かせるということでした。キリストもまた勝利を得る者〔黙示録3章21節〕だったので。

ハバクク3章9節に示唆があるのかもしれませんが、「あなたの弓はおおいを取り払われ、ことばの杖の誓いが果たされますセラ」。「それは口から出る」剣のように、その弓は、彼のことばによって人の心を捉えることを物語っているのです。一方、同時に、同じみことばによって邪悪な人の反乱を打ち砕きます。ともかく、「あなたのさばきが地に行われるとき、世界の住民は義を学んだからです」〔イザヤ書26章9節〕。封印が解かれ、ラッパは吹かれ、鉢が注ぎだされる時、邪悪な者は、確かに打ち破られますが、同時に、大群衆がキリストに引き入れられるでしょう〔黙示録7章9節〕。虹のように弓はさばきの最中に慈悲があることを物語っているのです。

「創造主のことば」〔黙示録19章13節〕と呼ばれる方によってその裁きは着手し、始められ、続けられ、終わらせられます。

## 戦争と飢饉

黙示録6章3節　小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい」と言っつのを聞いた。

大きな弓を持って世界を征服するために乗っている白い馬がヨハネの視界から消えた時、ヨハネは再び天の御座の真ん中にいる小羊を見ました。白い馬の騎手が見えたのは、地上にまさに始まるうとしている裁きが小羊の管理下にあることを表していました。事実この最初の騎手と小羊が現しているのは共にヨハネの愛した主、創造主の小羊として世の罪を取り除いた方であり、白い馬の偉大な騎手として、今や世の罪人を追放するために馬に乗って進んでいるその方です。

それから、小羊が地球の権利証書にある第二の封印を解いた時、第二の偉大なケルブ(ヨハネには子牛か雄牛のように最初見えていた)が雷のような声で語り、第二の騎手が乗る準備をした。

黙示録6章4節　すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。

地上に平和の一時がありました。しかし、それは短く錯覚のようなものでした。赤い馬(血染めの馬)に乗った第二の騎手は、地上から平和を取り去るように小羊に命じられた。「戦争と戦争のうわさ」(マタイによる福音書24章6節)が再び突発した。その時、国は国に敵対して立ち上がり、人々はまたもお互いに殺しあいに着手します。

創造主の形にかたどって創造された人が、他人の尊いいのちを滅ぼそうと求めるほど憎しみと欲と野望と妬みで盲目になるのは驚くべきことです。けれども、世界で最初に生まれたその人が弟を殺したのです。そして、人々はそれ以来ずっとカインの習慣を続けています。蒙古のジンギスカンだけでなく、文明の進んだ20世紀の洗練された虐殺者ドイツのナチの人々、中華人民共和国、ロシアのスターリンは、何百万という人々を殺しました。カンボジアやベトナムそれにアフリカのいろいろな種族の皆殺しは同じ型で続いています。

人々は平和を切に求めています。平和条約、軍備縮小会議、国連、数々の平和賞、平和宣言があります。すべて何とかして長く続く世界平和をもたらそうとして設定されたものです。しかし、すべて失敗しました。それから、ロシアとイスラムの連合軍が突然崩壊し、楽観主義のすさまじい大波が押し寄せてきます。そこで、世界は平和と繁栄が長く続くことを期待しました。また、わずらわしいクリスチャンたちも消え去ったし、あらゆる快楽を心置きなく楽しむことと、人の罪深い心の気ままさを抑制するものは何もなくなりました。しかしそれは続かなかったのです。心ならずも人々は、またもや間もなくお互いに争いを始めます。これは、国と国との間の実際の戦争だけではなく、労働争議のように民族間の争いは増加します。内乱(国内戦争)が国々で勃発し、組織化した犯罪がたけり狂います。個人的不和が殺人の波を生み出し、間もなくほぼ無秩序の状態が広がります。警察力や軍隊もまた内外の争いに関わり役立つことは殆どなくなります。何事も助

けにならず、人々はほとんど心ならずも争い始めます。創造主は、「惑わす力」を送り(IIテサロニケ人への手紙2章11節)、赤い馬に乗った騎手は地上から平和を取り去り、見えない致命的な彼の大きな剣が心に突き刺さりります。

**黙示録6章5節** 小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。黒い馬であった。これに乗っている者は量りを手に持っていた。

第一の騎手は大きな弓を持ち、第二の騎手は大きな剣を持っていた。第三の騎手はただ一組のはかりを持っていたが、これもすばらしい武器の象徴です。はかりは貿易と商売、商品にとって同等の価格の決定を示します。繁栄または大きな不運、インフレとデフレ、裕福と窮乏を生み出す商売の力は、政治家や商人や銀行家によって数千年にわたって理解され操作されてきており、さかのぼれば古代バビロンで始まっています。シュメールの石碑、恐らく、すべての知られている考古学上のオーパーツ(人工加工物)のうち最も古いもので、それは今日の商業と貿易活動とまったく同じであったことを示しています。

ゼカリヤ書に顕著な予言があり、明らかにこの同じ主題を取り扱っています。ゼカリヤは、エパ枡が地球の全地に出て行き、最後には「シヌアルの地」(ゼカリヤ書5章5-11節)に運ばれるのを見たのです。エパ枡は小麦やその他の日用品の基準になる枡目で、大雑把に36リットルと同じ量でした。実際のはかりは、天秤に付いているエパ枡を保持するようにデザインされた容器をもって装備されていました。ゼカリヤは、エパ枡に座っている女を見ました。しかしながら、その口の上に鉛の重り(すなわち、円形の鉛のおもり)を付けていた。一人の女はエパ枡の中に、翼を持った二人の女がそれをスメール(シヌアルと同じ)の地に持っていた。

そこは世界の富と商取引の全体系が最初に発展したところで、その時から地上全体に広がった。「これは罪悪だ」と天使は言った〔ゼカリヤ書5章8節〕、そして「シヌアルの地で、あの女のために神殿を建てる。それが整うと、そのこの台の上に安置するためだ。」「ゼカリヤ書5章11節」とあるようにそれはバビロンへ搬送された。大淫婦バビロンが黙示録17、18章で再び見られます。明らかに、そこにこの邪悪な組織が実際に元の土台の上に据えられます。そこで、大淫婦がもう一度、世界の富と貿易を管理し操作します。

バビロンはいまだで大部分が廃墟になっていますが、イラクの首都バグダットに実に近いところなのです。イラクは今日、巨大な石油貯蔵の中心で、イランやサウジアラビアの地下資源よりもっと利益を得ているのです。幾年もの間、水の制御計画がイラクを流れる大河チグリスとユウフラテスの水を動力化しています。そして、時々、いつか新しいバビロンが建つと語られています。

バビロンは世界貿易と交通の中心としてまた、実際に世界の首都としてさえ役立つ理想的な場所です。ICR（創造科学調査研究所）コンピュータ研究で数年前この地域が全世界の陸地の地理学的中心に非常に近いことを証明しました。終りの時代の獣の世界帝国の実際の首都になるかもしれないという明らかな指摘を視野に入れて（黙示録17、18章の注解を見よ）、たぶんバビロンを再建する（最初は貿易センターとして、後では首都となるために）決断は、エルサレムの宮を再建する決断とほぼ同じ時になされるでしょう。その頃までには、アメリカの経済的影響（今すでに傾きかかっている）は過去一世紀の重要性に比べはるかに少なくなるでしょう。ロシアの敗北とペルシャ湾とインド洋の重要性の増加で、おそらく世界の工業の指導者と国際銀行は経済の国際的首都が、地球の最初の中心城市の廃墟の中から立ち上げられた超近代的新中心都市に建て上げるべきだと決断することでしょう。おそらく、国際連合でさえいわゆる「ハドソン河畔のバビロン」からユ-

フラテス河畔に最も重要なバビロンを移す決定を下すことでしょう。

彼らがどこに中心を置こうとも、これらの国際的資本主義者たちは、世界の巨大な石油資源とともに食糧資源とその資金供給の完全な支配力を手に入れる機会として新しい平和の期間を利用し始めるでしょう。しかし、黒い馬の騎手は彼らの計画をかかなりの規模で打ち砕きます。世界の広範囲に突然の飢饉が直撃します。

これは、創造主の二人の証人が全世界に二年半の旱魃を呼び求めている期間にあたります（黙示録11章3〜6節の注解を見よ）。凄まじい飢饉、それに食糧の不足と空腹がすぐに続きます。

**黙示録6章6節**　すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言つのを聞いた。「小麦一枘は一デナリ。大麦三枘も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」

これは驚くべき啓示です。四つの生き物の真ん中から語られる声は、創造主御自身の声であり、日用品の値段を明確に示しています。明らかにその声は黒い馬の騎手に、そして、恐らく、農産物の成長に影響する風や雨や他の自然力を支配する多くの天使たちにも向けられ、飢饉が正確にどのくらい厳しくなるかについて彼らに指示しています。

「枘」は、ギリシャ語のコイニックスで、約0.7リットルであり、ペニーはデナリで、労働者が一日働いて得る値の貨幣です。この値段は、窮乏のきびしい状態を表わしています。その状態は稼ぎ手がやっと生きてゆける値です。もし雇用されなければ、また、彼らに家族がいたら、ある人は恐らく蓄えを使うことなしに、または政府の支給によって食べさせてもらえなければ生きられなかったでしょう。

油とぶどう酒を害してはいけないとの指示は、厳格で風刺的です。油とぶどう酒は小麦や大麦のような必需品ではなくぜいたく品です。これらは高価であり、主として金持ちの嗜好品です。それらは、基本的食糧が不足しているにもかかわらず、その時、十分な供給で手に入られます。必需品の値が高くなる時には贅沢品の需要は通常低下します。

「油」は、オリーブ油を指す代わりに、通常言われているように、石油の事を指す可能性はほとんどありません。石油は新約聖書の時代には知られてなかったが、現代では非常に大切なものです。来るべき反キリストの未来帝国では益々重要なものになるはずで、ぶどう酒は数千年にわたって世界中の人を大いに夢中にさせる(酔わせる)飲み物でしたが、この本文ではすべての夢中にさせる飲み物を表しているかもしれません。こうして、ここでの創造主の指示は、世界の燃料とアルコール飲料を保存すべきであるということかも知れません。これは、食糧不足で苦しんでいる最中でさえも、人々に彼らの罪深い食欲を最大限に満たすのを許し、来るべき裁きの公正さを明らかにします。

どちらの場合も、第三の封印が解かれた後世界を蹂躪する特徴は、暴力と無秩序に近い状態で、それに伴って、きびしい飢饉と食糧不足があるのです。

## 殉教者たちの血

黙示録6章7節　小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい。」と言うのを聞いた。

四つの生きものの最後の生きものが、ここで招きの声を出すと、黙示録の第四の騎手が進んで行きます。今までの多くの著者は、ライオン、牛、人と鷲に似た外観をしている四つの獣とマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる福音書の類似性に注意を促してきました。その各々が、イスラエルの王、受難の僕、人の子、創造主の子としての四重の能力をもつ主イエス・キリストを描写しているのです。四福音書の各々は、キリストが、世の罪を取り除くため贖いの小羊として地に来るために天にある栄光の御座を去った方である主イエスを「来て見なさい」と、すべての人々を招いているのです。キリストは世の罪を取り除くためあがないの子羊として地に来るために、栄光の御座を去った方です。四つの力あるケルビムの各々が、すべての被造物に対して、創造主の力強い裁きで世の罪を取り去るために再び地上に帰ってくるキリスト(創造主の子羊)を見に来てくださいと招いているかのようです。

黙示録6章8節　私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、そのあとにはハデスがつき従った。彼らに地上の四分の一を剣とききんと死病と地上の獣によって殺す権威が与えられた。

第四の馬は、青ざめた色の(ギリシャ語でクロロス)馬であった。同じことばが、マルコによる福音書6章39節、黙示録8章7節と黙示録9章4節にある草の色を描写するのに用いられました。青ざめた色は、一般にいのちに関係した色です。でも、馬の騎手は死と呼ばれています。その象徴は恐らく予言的皮肉として

意図されているでしょう。最近の出来事によって生み出された人間中心の考え（ヒューマニズム）に立つ楽天主義が、それを長い年月探し求めていたのです。平和と贅沢な理想的生活の達成が間近と喜び、創造主を敬わない世界へ人々を導いています。

地球を荒廃させる創造主の裁きによって、彼らが予期していたよい生活は、速やかに灰燼に帰すでしょう。いのちは死とハデスによって打ち負かされ速やかに死んだ人々の魂を飲み込んでしまっています。

第四の騎手に関与した裁きは、第二と第三（剣と飢饉）の騎手によってもたらされた裁きを含み、これらはすべて第一の騎手に指示されるものです。キリストが死とハデスの鍵を持っておられる【黙示録1章18節】とのキリストの主張から明らかのように、地上全体に及ぶ死とハデスの災害の責任は、直接キリスト御自身にあります。

世界規模の暴力と飢饉に加えて、この最後の騎手は「死」と「地の野獣」も連れてきます。「死」のためのことばは、ギリシャ語で *thanatos* で、同じことばがその騎手の名に用いられています。それはしばしば訳されているように「伝染病」（ギリシア語 *loimos*）を意味しませんが、激しい暴力行為と飢饉はしばしば伝染病を引き起こします。しかし、その用語自体は死をもたらすすべてを含みます。年老いて死ぬことから交通事故または自殺までのすべてのことが、死の原因になるかも知れません、そして、すべてが含まれます。世界人口が全歴史を通して最大になるけれども、死亡率も最大になるでしょう。事実、世界の全人口の四分の一が死ぬでしょう。これは少なくとも10億人でしょう。なぜなら、世界の現在の人口は少なくとも40億人ですから。さらに、これはすべて黙示録6章から11章で包含する最初の三年半の一、二年内に起こります。

この大きな死傷者を招いた死の興味ある特有の理由は「地の獣」であるとさらに言われています。人にとつて実際に危険な獣は、すべて絶滅したか、または今や稀で、絶滅の危機にある生物なのです。終わりの時の二、三年のうちに、野の獣が真に脅威になるほどの数に増えることはあり得ないと考えられます。しかし、その用語は使徒28章4、5節に毒をはらんだマムシに言及して用いられています。この節は、全地上に毒蛇が急に増加する前兆の可能性があるので。

この「獣」ということばはギリシャ語 *theiron* で、事実上、野生で危険なまたは毒液を分泌する動物を意味します。*theiron* は創造主のみ座の周りの「生き物」と関連している *beast*、獣と訳される *zoon* という言葉とは異なります。しかしながら、*theiron* が黙示録で38回も用いられています。そして、すべての場合、そのことばは、創造主を敬はない勢力の強い邪悪な指導者のための象徴として用いられています。こうして、この節の「地の獣たち」は、後の日の政治的軍事的独裁者に対する言及と取ることが出来ます。主はしばらくの間彼らがそれぞれの国民を征服し迫害することを許されます。

**黙示録6章9節** 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいたのを見た。

四人の騎手が馬に乗り進み出ると、創造主の大きいなる裁きが解き放たれました。小羊が第五の封印を紐解くことによって、不思議な異なった場面を導き出します。馬人間のようにヨハネが見た祭壇は象徴的かもしれませんが、祭壇の下の多くの魂は本物かもしれません。それにもかかわらず、殉教者は本物で彼らの叫び声も本物です。

祭壇の下に流された血の表現は、レビ記4章17〜18節から取られました。「祭司は、…彼はその血の全部を、会見の天幕の入口にある全焼のいけにえの祭壇の土台に注がなくてはならない」レビ記の祭壇の下にあった血は、贖いの犠牲からのものでした。そして、「肉のいのちは血の中にあるからである。」「いのち」に当るヘブル人への手紙（語ネフェシユ）はしばしば魂と訳されます。その血は、死に値する人々の身代わりに流された罪なき血であり、そして、十字架にかかって人びとを救うために来られた創造主の御子・小羊の罪なき血を予示しているのです。祭壇の下の魂は、同様に、彼らの救い主のために命がけで証をして、救いに導こうとした人の血が人々によって流されたのです。

しかし、これらの殉教者は誰でしょうか。信じた者すべての魂は、大いなる復活の日に栄化された身体で装われていました。それは、キリストが最初に地球大気に天から下って来た時です〔テサロニケ人への手紙4章16〜17節〕。こう解釈する根拠はすでに検討し、結論を出しています。従ってこの時点での殉教者は、7年の患難期の最初の1年の間にキリストのために死んだ人々だけでしょう。このことは取りも直さず、その1年間に信者になった人々です。なぜなら、生きていたすべての信者は、復活の時にキリストの面前に携拳されていたからです。

前述したとおり、「地の獣」が、邪悪な統治者に対する言及かも知れないと信じる理由がいくらかあるのです。この期間に彼らこの邪悪な当事者は特別な政権を打ち立て、整理統合しながら、多くの人を死に追いやり、これがあの節の特殊な意味であろうとなかろうと、彼らがした証のために殺された殉教者は、これらの指導者によって命じられたか許可されたかによる宗教的迫害の犠牲者に違いないのです。

このことは、とりも直さず、何かが、この期間にまことの創造主とキリストを信じる者の大いなる信仰復興を生み出したことを意味します。実際、患難期のはじめに地上には、キリストを信じる者は誰も居なかったにもかかわらずです。一つには、創造主は「二人の証人」を世に送ります〔黙示録11章3節〕。彼らは、力ある奇跡を予告し呼び出します。ともかく、この期間に創造主に奉仕するため印を押された十四万四千人のイスラエル人たちも居るのです〔黙示録7章4節〕。その結果、非常に多くの群衆が救われるでしょう〔黙示録7章9節〕。彼らの証に人が最後に目を向けるように、表に出て来ない証人が他に居ることは確かです。何百万千万という聖書と聖書の分冊がすべての主な国語で出版され、ギデオンやウィックリフ聖書翻訳団体、そして、他のこのようなキリスト教団体に属する献身的な聖職者たちによって世界中に配られていました。携拳で世界中からクリスチャンが天に移されるが、聖書はそのまま地上に残されるでしょう。

そして、一般大衆は、確かに、止むを得ず聖書を読むようになるでしょう。更に、最近の創造論教義の大いなる復活があります。また、長く知識人に有力であった進化論的人間中心主義の理論は、創造論に立つ科学者の多くの本、講義、討論会やその他の活動によって、その土台が著しく損なわれています。クリスチャンの突然の消失と同時に、二人の証人の驚異的宣教と地上に押し寄せる大きな災害が続きます。大勢の人々が、実際に創造主である創造主が居ること、最後に創造主がお創りになった世界を裁き清めるために来ることを認めます。こうして、大勢の人がこれらの日々創造主と救い主に頼り、創造主のことばであるイエス・キリストの証をし、彼らが世が苦しんでいる惨事・災害は、主からの裁きである事を世の人々に説得することに専念し、いのちを与える事さえ喜んでするのです。

黙示録6章10節 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住

む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」

キリストが死から甦った時、キリストは信者の魂をご自分と一緒に天に連れ帰ったのです〔エペソ人への手紙4章8〜10節〕。再臨に当たって、死んだ信者と生きている信者は共に復活の身体を受け〔ピリピ人への手紙3章20、21節、1コリント人への手紙15章51〜53節〕、それ以降永遠にキリストと共に居ることになります〔1テサロニケ人への手紙4章16〜17節〕。救われなかった死者は、ハデスに留まっていたし、将来キリストなしに死ぬ他のすべての魂も、最後の審判に先立って死と黄泉の支配下にあるこれらすべての者の復活まで黄泉に留まっています〔黙示録20章13節〕。

しかし、聖徒の復活後キリストにあつて死んだ人々に関する問題は未解決です。明らかに、彼らの魂は主の御座の近くに移されるでしょう。そこで彼らはレビ記の幕屋にある「祭壇のもと」に類似したところで休みます。そこで、彼らは身体の甦りを待つのです。彼らの身体は、地上での創造主の裁きが最終的に完了した後、明らかに復活するでしょう。

彼らの申し開きの祈りは「聖く真実」なものととして、主に訴えています。主の聖（きよさ）と真実は、これ以上長く人の邪悪さと悪者の偽りに耐えることはできません。しかし、創造主は、辛抱強く、地上の裁きが強化される時、多くの人が次々と主に立ち返るでしょう。

黙示録6章11節　すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言ひ渡された。

「白い衣」は彼らの正しい行為と同じようにキリストにある彼らの信仰を通して彼らに転化されたキリストの義の象徴です（黙示録19章8節を参照）。御座で白い衣をまとっていると記されている会衆（集団）とおそらく同じ人々でしょう〔黙示録7章9節〕。彼らは「その衣を小羊の血で洗い、それを白くした」と言われた人々です〔黙示録7章14節〕。

しかし、「魂」が実際に白い衣をどのように身につけられるのでしょうか？この関係を私たちは完全に答えることはできません。ですが、主イエス・キリストが肉体で天に昇っていったことと、同じ栄化された身体で天から下つて来る事を覚えて下さい〔使徒の働き9章11節〕。その間、キリストは弟子たちのために「場所」を準備するために天にいました〔ヨハネによる福音書14章2〜3節〕。一つの場所が空間に実在し、こうして自然界に實際存在する所となるのです。その場所は栄化されたキリストが初臨と再臨の間経過しておられるところであり、その場所はキリストが空中に降ってくる時、そして最終的に新しい地球に行く時、キリストが私たちと一緒に連れて行く所です〔黙示録21章1〜3節〕。

今日でさえ、キリスト者の魂がキリストと一緒にいるため肉体を離れた時、彼らは天の幕屋で「衣を身にまとつて」います。そして彼らの身体はまだ墓の中にあるけれども、彼らが誰かが認識されます〔1コリント人への手紙5章1〜8節〕。同じように、これらの患難期の信者たちの魂が彼ら自身の復活を待ちながら、白い衣を身にまとっているのです。

患難期は少なくともお5年あります。そして、より多くの人が創造主に立ち返ります。これら多くの人は、彼らの信仰と証のために同様に殺されるでしょう。それから後、すでに祭壇の下にいる人々に加わり、天の

幕屋にあって、彼ら自身の白い衣を身にとっています。

## 恐ろしい地震で地が震えおののく

黙示録6章12節　私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。

次の封印をひも解く事は、地上に別の大惨事をもたらします。しかし、この封印は最初の四人の騎士が齎した災害の続きの状態ではなく、地上に起こる自然界の幾つもの変動の一大複合体であった。しかし、他のどのような災害よりも地の住民に対し、その短さと激しさをより雄弁に語っています。彼等はすでに戦争や飢餓と疫病を世にある通常の暴力と同様に経験していたのです。地震でさえ長年にわたり「いろいろなところで起こっていました。しかし、多くの人々は、これらを創造主の警告と見るのを拒否してきました。

主イエス・キリストは、世界的規模の飢饉、疫病、大地震、天からのものすごい前兆と国々に内乱があり戦争の継続する状態が世界中に広まるが、それさえキリスト再臨と今の時代の終わりの大いなるしるしであると弟子たちに語られました〔マタイによる福音書24章7節、マルコによる福音書13章8節、ルカによる福音書21章11節〕。これらすべてが「苦しみのはじまり」すなわち、産みの苦しみの初め、新しい時代の差し迫った到来を予言しているのです。事実、これら幾つかの出来事で構成された苦しみは、歴史上最初に、第一次世界大戦と関連して起こり、第二回目は、第二次世界大戦に関して起こる同じような産みの苦しみです。

封印が小羊によって紐解かれるとき、世界に、少なくとも第三回目の苦しみの同じ組み合わせが、繰り返されますが、災害はかつてなかったほど厳しいものになるでしょう。特に、ここに記されているような大地震が本当にあり、歴史上最初で世界的規模の広がり的大地震となります。

近年の地震学者と地球物理学者は地球の構造と地震の原因と性質について多くを学びました。地球の固い地殻は複雑な断層の網目構造で横切られています。すべての地殻は構造がまだ殆ど解らない柔軟なマントルの上に乗っています。地殻が移動している大きなプレートから成っているかどうかは、今日地球物理学者の間で論争中の問題で、究極的地震の原因はまだ分かっていません。たぶん、十中八九、不安定な地殻で、その実に不安定な複雑さは、特に、大いなる水の源がごとく張り裂けたノアの大洪水の名残の現象です。

ともかく、世界を取りまく不安定な世界中に張り巡らされた広範な地震帯の網目が突然すべりはじめ、地球の土台に裂け目が出来、巨大地震が続いて起こります。これには明らかに、大量の塵と水蒸気とガスを大気上空に噴出するものすごい火山噴火を伴います。恐らく、これらが太陽を暗くし、月を赤く染まらせる原因となることでしょう。

ヨエルは、この時について明らかに語っています。「わたしは天と地に、不思議なしるしを現わす。血と火と煙の柱である。主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる」〔ヨエル書2章30、31節〕。おおくの他の預言者たちが主の日の暗黒について語っています。「その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、やみと暗黒の日、雲と暗やみの日」〔ゼバニヤ書1章15節〕。「見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。」〔イザヤ書13章9、10節〕

黙示録6章13節　そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。

12節の「地震」は、実に地球だけでないことを意味しています。ギリシャ語のセイスマスという用語は、文字通りには「震えている」を意味し、空気や海とともに陸地に当てはめることが出来ます。マタイによる福音書8章24節で、それは「大暴風」と訳されています。地上にいる人々にとって、空は地球と同様に震えているように思われます。それはあたかも幾つもの星そのものが天での繫留箇所が緩み震えていて、地球に向かつて下げ振りをしているかのようです。「まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。」〔ハガイ書2章6～7節〕

単語「星」(ギリシャ語でアスター)は、太陽や月以外の空にあつて光っているすべての物体を指します。明らかにここでの「星」は、今日私たちが星と呼んでいる遠くにある星のような物ではなくて、本文の用語は、今日私たちが「流星」と呼んでいる隕石を指すに過ぎないと思われれます。流星は今日の私たちと同様に、ヨハネにとつてはなじみのものであったと思われれます。

これらの特殊な流星に最も似ていて確認できるのが、群れをなして地球を連打する小惑星のようなものです。このような事は、地球の歴史上決して起こったことはありません。しかし、科学者たちは、過去未来のいずれかの地球の大災害は群れをなす小惑星が地球とぶつかることに起因する可能性があるという長い間推測しています。

このような衝突が起こる可能性は大いにあります。そして、衝撃を受けた近くの地上に、大きな荒廃をもたらす原因となるでしょう。巨大な隕石のシャワーは大いに同じ結果をもたらすかも知れません。これが地球規模の地震を解き放す引き金にさえなるのかも知れないのです。

黙示録6章14節　天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。

この不可解な予言はイザヤ書34章4節にも写し出されています。「天の万象は朽ち果て、天は巻き物のよう

に巻かれる。その万象は、枯れ落ちる。ぶどうの木から葉が枯れ落ちるように。いちじくの木から葉が枯れ落ちるように。」「天の万象」は、聖書の中で通常星に用いられる言い回しです。天の星たちは実際には、決して「消え去る」ことはありません。なぜなら、星は永遠に輝くと聖書が言っているからです〔詩篇148篇3～6節〕。しかしながら、太陽や月が暗くなると同じ理由で天が消え去るらしいのです。地球の深みから噴出する「煙の柱」からの塵とガスはすべての天体からの光をさえぎり屈折させます。

天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、もつと理解が困難です。二つの可能性があるようです。一つは、塵の雲が徐々に空を横切つて広がるでしょう。それは空が巻き上げられるように見えます。しかし、写実的な用語「消え去り」は、これより更に劇的な大切なことを示唆しています。もう一つの可能性は、大洪水以降非常に不安定になっている地殻が、撃ちつける小惑星、火山噴火、世界規模の地震よって乱れに乱れ、その大きな破片が、実際に、地球の深みにある柔軟なマントルの上を滑りかつ滑走し始めます。長年にわたつ

て、地球物理学者は、「大陸移動」の考えに悩殺されてきました（強力な証拠が現代起こっているこのような現象に反して蓄積されているとはいえ）。数人の学者が過去の自然大災害の理論について出版していました。

その中には彼らが「地球の移動している地殻」と呼んでいるものも含まれています。そのような現象のいくつかは、過去の力強い地震によって引き起こされた損害を小さく見せる第六の封印の裁きに基ついて放たれた物かもしれません。このように移動をしている地殻構造の上の地域に住んでいる人々は、逆方向に動いているように見える天を観察するでしょう。それはあたかも「巻かれる」かのように見えるのです。

そして、その過程で、すべての山や島（島々は海面下にある山である）は、それらの場所から動かされるかのようなのです。このような驚くべき現象は、地殻の地域を越えたとすれによって起こされるに違いありません。

**黙示録6章15節 地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、**

宇宙の力のそのように並はずれた披露は、最後には、政界、実業界、知識階級、軍隊の指導者たちのすべてを含め、創造主を敬わない世界の注意を引くでしょう。彼らこそが前もってなされた裁きの警告を無視し、その裁きは小羊の怒りによるものであると世に証しようとした人々を迫害し殺した人々です。

もし指導者たちが、恐ろしい大地の激動におびえ驚くなら、一般の人々はもつと恐れるでしょう。ある程度の自由を楽しんでいる人々も監禁されている人々もです（ギリシャ語ドウロスという言葉は、奴隷と隷属されている人々の両者に当てられ、中国や、他の奴隷国家のような彼ら自身の選択によらない職業で働か

せられている人々を指します）。

どこでも可能なら人々・特に指導者たちは、落ちてくる星や地上の荒廃から逃れることを希望して、核攻撃を避けるようにもともと市民のために設計され用意された地下の防壁に、または、マンモスケープのような大きな自然界にある洞窟に逃げ込みます。

**黙示録6章16節 山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りから、私たちをかまくまってくれ。」**

彼らの指導者も含め地上の住民は、ついに、無神論や進化論に立つヒューマニズム（人間中心主義）の愚かさを悟らされます。そして、天地の創造主が実際に天の御座に居られることを認めます。彼等は、彼らが拒否してきた方〔詩篇2篇1-3節〕が、怒って彼らに語っておられ、極度に立腹して彼らを困らせていることをいやながら認めるでしょう〔詩篇2篇4、5節〕。この事実を彼らに証した人々の証は死刑執行により沈黙させられたが、いまや、小羊自身が怒られた。そして、「怒りはいまにも燃えようとしている」彼等はみな「道で滅びようとしているのです」〔詩篇2篇12節〕。これら地の王や裁判人はもはや自慢したり脅したりしないで、地球にあるほら穴で震えていたのです。

滑走する地殻と振動する岩石のため、避難所の多くは、彼らの上に崩れ落ちて来るので、彼等はそこにも安全ではないのです。しかし、これでさえいまや、小羊による裁きにさらに直面し殺される方が好ましく思われました。そして、彼等は速やかな破滅をすることさえ祈ったのです。

## 黙示録6章17節 御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

人々が創造主とその全能を最終的に喜んで認めるのが、少なくともためになる事でした。人が自分の創造主を御座から引きずり落とせると「むなしいことを考える」〔詩篇2篇1節〕のは、被造物にとって馬鹿げたことです。そしてこの恐ろしい自然界の大激変（隆起）は、この事実を彼らに認めさせるのです。しかし、悪霊たちと同じように、彼らはただ単に創造主を信じ身震いして、〔ヤコブの手紙2章19節〕 なお、許しと救いを求めてキリストに立ち返るのを拒否しているのです。

イザヤもこの日を予見しています。「岩の間にはいり、ちりの中に身を隠せ。主の恐るべき御顔を避け、そのご威光の輝きを避けて。その日には、高ぶる者の目も低くされ、高慢な者もかがめられ、主おひとりだけが高められる。・・・主が立ち上がり、地をおのかせるとき、人々は主の恐るべき御顔を避け、ご威光の輝きを避けて、岩のほら穴や、土の穴にはいる。」〔イザヤ書2章10～19節〕

それにしても、驚くべきことに、このことさえ過ぎ去ります。これらの恐ろしい二三日の後、星星が落ちるのをやめ、ひどい振動はおさまります。生き残りの者たちは彼らの避難所から出てきた上で、彼らの創造主への抵抗にもっともらしい説明をします。結局、これらの恐ろしい災害は、科学的に説明されるはずであり、したがって、彼らは、これらの災害を創造主の怒りに帰すのは余りにも速過ぎるとするでしょう。彼等は速やかに破壊された建物の立て直しに取りかかり、キリストの福音にかつてないほどに反対するようになります。

それにもかかわらず、実際に信じ救われた多くの人がいきました。彼等は創造主のことば（キリスト）と差し迫った裁きについて人々を恐れず新たな証をします。こうして、彼らも速やかに天の幕屋にある殉教者の隊列に加わります。

